中国短期大学保育学科における鍵盤楽器未経験者に対する演奏技術向上の為の取り組み（１）

A Trial to Improve the Playing Method for the Inexperienced Students of Keyboard Instruments in Childcare Department of Chugoku Junior College（1）

（2015年３月31日受理）

松井　みさ　　土谷由美子　　大山佐知子
Misa Matsui　　Yumiko Tsuchiya　　Sachiko Oyama

Key words：バイエル教則本，ピアノ演奏技術，補習

要　　旨

中国短期大学保育学科において，鍵盤楽器未経験者の演奏技術向上を図るため，１年前期開講科目である音楽基礎演習Aの授業到達度を調べ，前期授業終了時に授業最低到達目標に達しなかった学生を対象に，夏休み中にピアノ実技の補習を行った。前期授業中に補習の予告をした事によって学生のピアノに対する学習意欲の向上が見られ，前期試験において，前年に比べて難易度の高い曲に挑戦する動きが見られた。さらに補習を行う事によって夏休み中も継続して学習を行う習慣ができ，意欲向上につながった。この意欲は，後期の授業にも継続され，前年度より鍵盤楽器未経験者の割合が多かったにもかかわらず，後期試験においても前年度より難易度の高い曲に挑戦しようとする動きが見られた。

は　じ　め　に

中国短期大学保育学科（以下本学と呼ぶ）では，音楽系開講科目として，「幼児音楽」（必修科目：１年前期），「音楽基礎演習Ａ・Ｂ」（選択科目：１年前・後期），「音楽実践演習Ａ・Ｂ」（選択科目：２年前・後期）が開講されている。このうち，音楽基礎演習Ａ・Ｂと音楽実践演習はＡ・Ｂはいわゆるピアノ演奏技術を中心に学ぶ科目である。しかし，これらの科目については，入学時までの鍵盤楽器演奏経験の有無によって能力の個人差が激しいのが現状である。さらに，近年鍵盤楽器未経験者の本学入学生に対する割合が多くなり，その結果，在学中の２年間だけでは，学生の技術向上が現場で通用するレベルまで到達することが難しい状況になっている。そこで，鍵盤楽器未経験で本学に入学した学生のピアノ演奏技術向上をより図る為に，今年度夏休みに前期最低到達目標に達しなかった１年生を対象に，補習を行った。その取り組みについて述べる。

現状の分析とその問題点

音楽基礎演習と音楽実践演習の授業終了時の最低到達目標と試験内容は表１のようになっている。

	最低到達目標	試験内容
音楽基礎演習Ａ（１年前期）	バイエル教則本終了	バイエル教則本74番以降の自由曲
音楽基礎演習Ｂ（１年後期）	マーチが弾けるようにする ブルグミュラー 25練習曲を何曲か弾けるようにする	中間試験：マーチの演奏 後期試験：ブルグミュラー 25練習曲以降の自由曲
音楽実践演習Ａ（２年前期）	童謡の弾き歌いができるようにする	童謡の弾き歌い（指示された童謡10曲から５曲選択当日１曲指定）
音楽実践演習Ｂ（２年後期）	現場で役立つピアノ演奏技術を身につける	自由曲の演奏

表１　音楽基礎演習と音楽実践演習の授業終了時の最低到達目標と試験内容

現在，本学入学時において鍵盤楽器未経験者は，１年前・後期の音楽基礎演習Ａ・Ｂの授業において，ピアノ演奏技術の基礎を学び，２年の音楽実践演習Ａ・Ｂの授業において，実践力つまり現場で役に立つ力を身につける事ができるようにカリキュラムを組んでいる。具体的な内容は，１年前期でバイエル教則本（以下バイエルと呼ぶ）を終了させ，後期でブルグミュラー 25練習曲（以下ブルグミュラーと呼ぶ）を学ぶ。２年では，前期の音楽実践演習Ａで，実習・就職試験等で役に立つように，弾き歌いを練習しつつ，ブルグミュラーをより深く学び，高い演奏技術を身につける。そして後期の音楽実践演習Ｂにおいてソナチネアルバム１巻の曲を弾けるようにする。しかし，上に述べた事は，我々指導者の理想に過ぎず，実際は２年間でソナチネアルバムどころか，ブルグミュラーにやっと入れる学生が少なからずいる。これでは，現場で通用しないばかりか，実習や就職試験においても不都合が生じてしまう。カリキュラム上はピアノ演奏技術の段階をきちんと踏んでいるし，そこまで無理がある進度とも思えない。では，多くの鍵盤楽器未経験の学生が２年間で思ったほど技術向上できないのは何が原因なのだろうか。すると，１年前期にバイエルが終了していないのに，後期の授業において，ブルグミュラーを強引に弾かせる事に問題があるのではないかという考えが出てきた。実際，入学時の鍵盤楽器未経験者で考えると，１年前期15回の授業では，バイエルが終了できていない学生は多くいる。前期試験がバイエル74番以降なので，試験曲を決める６月頃になれば，たとえバイエルの40番台を弾いていても，途中を飛ばして74番以降の試験曲を練習させているのが実情である。その結果，学生は，途中を飛ばしたままバイエル後半の曲を練習する事になる。さらに，後期の授業では，前期のうちにバイエルが終了している事が前提なので，中間試験のマーチの練習と平行して，ブルグミュラーを弾き始める。つまり，バイエルが終了していないまま，次の曲集を学ぶ事になってしまっている。もちろん今までも，ピアノ初心者で前期期間中にバイエルが終了できなかった学生は，夏休みの間，バイエルの残りを練習して終了させるように指導はしている。しかし，後期の授業開始時に，夏休み中の練習の成果を確認する事は行っていなかった為，実際何人の学生がきちんと練習してバイエルを終了させているのかは把握していない。この，バイエルを終了させるという，基礎の確立がきちんとできていないまま，次の段階であるブルグミュラーに進んでしまった事が，学生の技術向上の妨げになっているのではないか。あわせて，後期にいきなり，学生本来の難易度以上の曲を練習させる事により，学生にピアノに対する苦手意識を強く持たせる結果になってしまった。その結果，学生の学習意欲が低下しているのではないかと考えた。

今年度の取り組みと結果

１．補習の内容

平成26年度は，本学１年生141名が音楽基礎演習Aを履修した。この授業は専任講師３名，非常勤講師６名の計９名で行っている。１コマ(90分)には６名の学生が入っており，授業はいわゆる個人レッスンの形式をとっている。それにより，学生個々の進度に対応した指導を行っている。さらに，学生には事前にアンケートをとり，鍵

盤楽器演奏経験の有無，有る場合の進度などを尋ね，進度の近い学生が同じクラスになるようにしている。これによって，効率的に授業を行うことができ，互いに切磋琢磨できるように工夫している。

今回，前期の授業終了時点で授業最低到達目標を達成していない学生を対象に，夏休み中の補習を行おうと考えた。授業期間中に，授業担当教員全員に補習の意図を理解していただいた上で，前期授業最終週に学生一人ひとりの実際の進度の記入をお願いした。そして，対象学生を前期試験終了後に集め，夏休み中の補習について説明を行った。

では，実際には学生はどんな曲を練習していたのか。今年度，前期授業終了時点で学生が実際に練習していた曲を進度別に分け，まとめたものを表２に示す。

	26年度	
バイエル60番台以前	23人	17.1%
バイエル70番台	17人	12.0%
バイエル80番台	17人	12.0%
バイエル90番～106番	30人	21.3%
ブルグミュラー以降	53人	37.6%

表２　前期授業終了時の学生の練習曲

表２より，バイエルの60番台かそれ以前を弾いている学生の割合が17.1%いて，70番台を弾いている学生の割合が12.0%いる。前期試験の最低ラインがバイエルの74番なので，70番台を弾いている学生の1/3が74番以前と仮定しても，前期授業終了時には試験の最低ラインに達していない学生が20%くらいいる事になる。前期授業終了時の最低到達目標は，表１よりバイエル終了なので，今回の補習はバイエルの90番台まで達していない学生57名と，履修はしたが，出席不良で受験資格を失った学生１名の合計58名を対象にした。バイエル90番を１つの区切りにした理由は，本来は，バイエル終了が最低到達目標だが，授業時間内にそこまで練習できていれば，夏休み中に個人で練習を行う事が可能だろうと判断した事と，バイエル未終了者全員を対象にした場合，対象者が88名と履修者の1/3近くになり，非常に多人数になってしまうからである。

一方，音楽基礎演習Ａの授業で，今年度（平成26年度）と昨年度（平成25年度），学生が前期試験で演奏した曲を進度別に分け，まとめたものを表３に示す。

	26年度			25年度		
バイエル70番台	20人	14.3%	61.4%	39人	29.8%	61.9%
バイエル80番台	20人	14.3%		９人	6.9%	
バイエル90番～106番	46人	32.8%		33人	25.2%	
ブルグミュラー以降	54人	38.6%		50人	38.1%	

表３　平成26年度と25年度の前期試験演奏曲

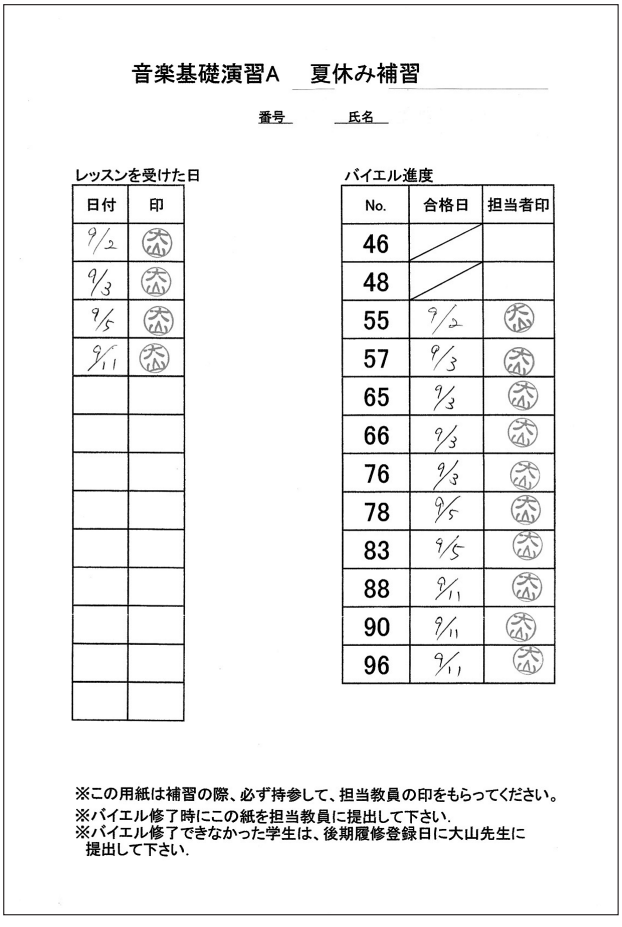
平成26年度は141名が履修したが，１名受験資格を失っているので，前期試験を受けたのは，140名である。平成25年度は，131名の学生が履修をしている。

表３より，前期試験においてバイエルを演奏した学生の割合は平成26年度生61.4%，平成25年度生61.9%と大きな差はないが，このバイエルを演奏した学生の中で考えると，平成25年度生は70番台を弾いた学生の割合が約30%とほぼ半分を占めているのに対して，平成26年度生の割合は90番台以降を弾いた学生が半分以上の約33%を占めている。

授業は，先程述べたように専任講師と非常勤講師で行っているが，今回行った夏休み中の補習は授業時間外であるので，専任講師３名で対応した。さらに，本来ならばバイエルすべての曲を練習するべきであるが，学生の負担を少しでも軽減するために，あらかじめバイエル40番以降からまんべんなくピックアップした曲12曲を練習してもらう事にした。既に授業内で合格している曲や前期試験で演奏した曲は免除として，何とか夏休み中にピックアップした曲を最後まで練習し，バイエルを終了するように指導を行った．専任講師３名も，研究室前に夏休みの予定表を掲示し，学生が予約を取りやすいように配慮した。さらに，対象学生には一人ひとりに練習する曲の番号を記入した個人カルテを配り，補習を受けた日，それぞれの曲が合格した日を教員に記入してもらうようにした。全曲合格した時点，つまりバイエルが終了した時点でその用紙を教員に提出して，練習の記録が残

るようにした。

実際に学生が使用した個人カルテを図１に示す。



音楽基礎演習A　夏休み補習

番号　　氏名

レッスンを受けた日

日付	印
9/2	大山
9/3	大山
9/5	大山
9/11	大山

バイエル進度

No.	合格日	担当者印
46		
48		
55	9/2	大山
57	9/3	大山
65	9/3	大山
66	9/3	大山
76	9/3	大山
78	9/5	大山
83	9/5	大山
88	9/11	大山
90	9/11	大山
96	9/11	大山

※この用紙は補習の際、必ず持参して、担当教員の印をもらってください。
※バイエル修了時にこの紙を担当教員に提出して下さい.
※バイエル修了できなかった学生は、後期履修登録日に大山先生に提出して下さい.

図１　補習で用いた個人カルテ

２．補習の結果

補習の結果は表４のようになった。

後期履修登録までに終了した	28人
後期授業期間中に終了した	２人
途中までしかできなかった(終了しなかった)	13人
１度も補習にこなかった	15人

表４　補習の結果

夏休み中に補習に参加した学生は58人中43人だったが，15人の学生は補習自体に全く参加しなかった。参加した学生のうち，後期履修登録日までにバイエルを終了した学生は28人だった。しかし残りの15人の学生は夏休み中にバイエルを最後まで終了する事はできなかった。補習に参加しなかった学生，バイエルを最後まで終了できなかった学生は,後期に入っても教員が声がけをして，空き時間等に補習をしてバイエルを最後まで終了するように指導をした。その結果，２名の学生は，最終的にはバイエルを終了した。残り28名の学生については，残念ながら，バイエルを終了することはできなかった。元々授業時間外の活動なので強制力はなく，後期の授業中でしっかり練習を行うように指導を行った。この結果をグラフにすると，表５のようになる。

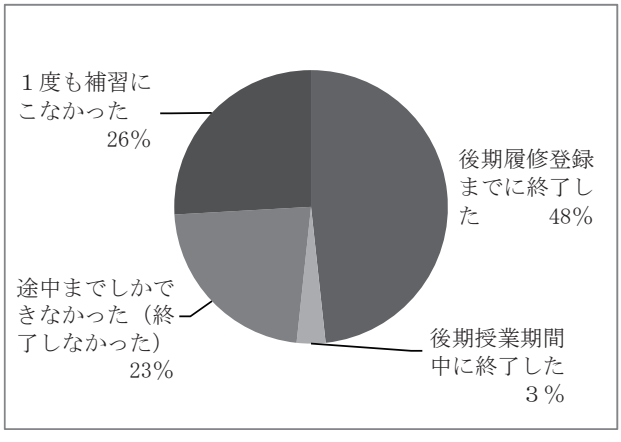


表５　補習の結果の割合

３．後期の授業における変化

後期に行われる音楽基礎演習Ｂでは，表１で述べたように，マーチの練習とブルグミュラーをある程度弾けるようになる事を到達目標としている。授業を行っての感想だが，今年度は例年に比べ鍵盤楽器初心者のピアノ練習に対する意欲が増しているように感じられた。マーチの曲も，難しい曲に挑戦しようとしたり，マーチの練習と平行して，ブルグミュラーも練習しようとしたりするなど，非常に前向きで，向上心にあふれた態度が見受けられた。

音楽基礎演習Ｂの授業で，今年度と昨年度，学生が後期試験で演奏した曲を進度別に分け，まとめたものを表６に示す。

	26年度			25年度		
ブルグミュラー１～５番	61人	44.5%	83.9%	73人	55.7%	84.0%
ブルグミュラー６～10番	15人	10.9%		５人	3.8%	
ブルグミュラー11～15番	23人	16.8%		18人	13.8%	
ブルグミュラー16～20番	４人	2.9%		５人	3.8%	
ブルグミュラー21～25番	12人	8.8%		９人	6.9%	
ソナチネ以降	22人	16.1%		21人	16.0%	

表６　平成26年度と25年度の後期試験演奏曲

平成26年度は137名が履修した。平成25年度は，131名の学生が履修をしている。

表６より，後期試験においてブルグミュラーを演奏した学生の割合は，平成26年度生，平成25年度生とも約84%と同じだが，平成26年度生は６～15番の初～中レベルの曲を演奏した学生が約28%と平成25年度生の約18%を大きく上回っている。一方，難易度の低い１～５番を演奏した学生は，平成26年度生44.5%，平成25年度生55.7%と昨年度の方が多くなっている。

考　　察

入学時に行ったアンケートより，自己申告であるが，鍵盤楽器未経験者および，ほとんど初心者に近い学生の割合は，平成26年度入学生の場合，全体の55%である。そして，前期試験においては，表2より61%の学生が，バイエルから試験曲を選んで弾いている。しかし，表2と表３を比べると，同じバイエルの中でも，実際の進度よりも番号がうしろの曲，つまり難易度の高い曲を試験曲に選んでいる傾向がある事が分かる。これは，試験曲がバイエル74番以降という下限が決められている事と，演奏によって点数がつき，成績に反映される事から考えて，少しでも難易度の高い曲を弾こうという意識の表れだと考えられる。その一方，やはり表2と表３を比べると，ブルグミュラー以降を演奏した学生の人数と，実際の進度との間には1名の差がある．ブルグミュラーを練習しているにも関わらず，試験でバイエルを演奏する事は考えにくいので，実際はバイエルを終了していないが，試験でブルグミュラーに挑戦した，と思われる学生が１名いたと思われる。このことから，学生は試験においてテキストを超えて難易度の高い曲を弾く事には消極的なことが見受けられる。そう考えると，今回我々が行ったバイエル未終了者に対する補習は，１冊のテキストを最後まで終わらせる，という意味において，学生の達成感を与えた事になる。さらに，ピアノ初心者に対して８月中旬から９月下旬までの夏休み期間に，ピアノ練習を継続的に行わせたので，夏休み中練習しなかった事による演奏技術の低下を，例年より少なくしたと思われる。そして，表４から，対象者の約半数が最終的にはバイエルを終了させているので，後期の授業に向けて学生の演奏技術の底上げにもある程度効果があったと考えられる。

後期については，表６から平成26年度はブルグミュラーの比較的難易度の低い１～10番を演奏した学生が55.4%と多くを占めている。後期は中間試験としてマーチを演奏するので，難易度の高い曲を練習する時間がないため，前期にバイエルを弾いた学生の大部分がブルグミュラー前半の曲を選んだと考えられる。

一方，昨年度である平成25年度生と比較して学生の進度について考察してみる。平成25年度の入学時アンケートによると，鍵盤楽器未経験者およびほとんど初心者の割合は，48%である。表３から，前期試験において，バイエルを演奏した学生の割合は61.9%と平成26年度入学生の61.4%とほぼ同じだが，平成25年度入学生は，バイエルの70番台を演奏した学生の割合は，平成26年度生の14.3%に対して，29.8%と高くなっており，平成26年度入学生に比べ難易度の低い曲を選んでいる割合が多くなっていることが分かる。平成25年度は，１年前期終了時に実際の進度を調べていないので，一概に比較はできないが，入学時，鍵盤楽器未経験者の割合が平成26年度生に比べ少ないにも関わらず，試験においては難易度の低い曲を弾いている学生の割合が多い事は，学生の学習意欲が低かったのではないかと推察される。逆に考えると，平成26年度は学生の学習意欲が前の年より高かったと考える事ができる。この傾向は１年次後期においても続いており，後期試験にブルグミュラーを演奏した学生が何番を弾いたかの割合を見てみると，平成26年度生の方が番号の高い曲を選んで演奏している事が分かる。ブルグミュラーが必ずしも難易度順に正しく並んでいると

は言えないが，番号が高くなるほど難易度が高くなる傾向はある。つまり，後期の授業においても，高い学習意欲をもって臨んでいたと考えられる。入学時においては，平成26年度生の方が，鍵盤楽器未経験者が多かったのにもかかわらず，前・後期の試験では難易度の高い曲に挑戦している学生が多い理由を考えた。すると，前期授業期間中に担当教員を通して夏休みの補習について知った事が，理由の一つとして考えられるのではないかと推察した。学生にとっては，授業期間中にしっかり練習してバイエルを終了すれば補習を受けなくて済む。たとえ，授業期間中に終了しなくても，少しでも先に進んでいれば，夏休みの負担が軽くなる。その思いが，しっかり練習してバイエルを終了させようという学習意欲の向上につながったのではないだろうか。そして後期試験においても，平成26年度生の方がより難易度の高い曲を試験曲に選んでいる傾向がある理由を考えた。すると，前期中に身につけた基礎技術をさらに発展させようとする思いや，それによって生まれたピアノ演奏に対する学習意欲が，そのまま維持されているからではないかと推察できる。つまり，前期の間にしっかりと練習をさせ基礎技術をつけて，目標に到達できなかった学生については，夏休み中に目標まで到達させる。そうする事によって，後期の授業も意欲的になり，より難易度の高い曲に挑戦しようとする意識が芽生えるように感じられる。

まとめと今後の課題

平成26年度の試みは，鍵盤楽器未経験者の学生にとって，バイエル終了という達成感や継続的な練習習慣をある程度与えることに成功した。その結果，学習意欲の向上やピアノの演奏技術向上に一定の成果があったように感じられた。しかし，本来の到達目標は，２年間で，現場で通用できる技術を身につける事である。そのためには，今回のように１年次夏休みだけの試みではなく，春休み，さらには２年次においてなど，２年間を通して学生のピアノ演奏技術向上のための工夫を重ねる事が必要になる。今回行った１年次夏休みの補習に関しても，参加に消極的な学生への対応や，夏休み中にバイエルを終了できなかった学生へのフォローをどのようにするか考えなければならない。さらには入学当初から学生の学習意欲をより高めるためにはどのようにすれば良いか，前期授業開始前に補習の事を伝えることを含め，改善の余地は多々ある。学生の到達度を引き続き調査するとともに，より技術向上につながる授業展開について研究を重ねることを今後の課題としたい。

参　考　文　献

全訳バイエル教則本　　全音楽譜出版社
ブルグミュラー25練習曲　　全音楽譜出版社